

独立行政法人労働者健康福祉機構全国脊髄損傷データベース研究会（編）
脊髄損傷の治療から社会復帰まで—全国脊髄損傷データベースの
分析から

佐伯 寛（産業医科大学リハビリテーション医学講座）

本書は、過去十数年にわたる 3,000 例を超える脊髄損傷例の分析結果をまとめたものである。年間の登録症例数は、わが国で新規発生する脊髄損傷者の数パーセントに相当する。現在の脊髄損傷急性期治療に始まり、社会あるいは学業復帰、さらには最近の脊髄損傷発生時年齢のピークが高齢に移行している現状を踏まえた解析など、脊髄損傷医療を網羅する情報が述べられている。

本書にあるデータベース（DB）は、1994 年、住田幹男氏（前関西労災病院リハビリテーション科部長）らが中心となり、全国 23 労災病院、総合せき損センターおよび吉備高原医療リハビリテーションセンターの脊髄損傷者のデータを収集し、DB 化したことに始まる。国際的には大規模な脊髄損傷 DB があるのに、わが国では全国規模の DB がなかったことがその開発の契機になっている。労災病院グループでこのような DB が構築された背景には、1954 年より本多純男氏（元関東労災病院リハビリテーション科部長）らが、労災病院を中心に脊髄損傷者の死因に関する調査・集計を継続的に行っていたことがある。50 年前に本 DB 構築に当たったの下の地ができていたのである。

在院日数短縮や病院機能分化など今日の医療環境は、在宅復帰あるいは社会復帰まで長期の入院リハビリテーションを要する脊髄損傷者にとっては、きわめて厳しいものになっている。経済面を優先させた画一的な医療政策は、脊髄損傷者の医療サービスの量的および質的低下をもたらしている。本書は、今日の医療政策に警鐘を鳴らすだけでなく、このような状況のなかで現在どのようなアプローチがなされているのか、何が有効なのかを著者らが分析データをもとに丹念に考察を加えている。

本書は、現在の脊髄損傷者の現状を医学的な立場から正確に分析したデータブックと言える。脊髄損傷特有の症候や病態に関する分析結果は、彼らの医療福祉の問題や課題を考えるうえでの重要な情報である。本 DB は継続的かつ安定的な運営を図る目的で、日本リハビリテーション医学会へ管理が移行されると聞いている。今後、定期的にデータ分析をした結果を本書のような形で公表していただきたいと思う。

（B5 判 179 頁 定価 1,800 円＋税 保健文化社刊 2010）